■ ジェンダー研究センター年報　第１号（2021）pp.18-35

近代日本における女子高等教育への道
―メソジスト女性宣教師と日本人教師から探る―

大森　秀子

はじめに

1982年は青山学院大学において一つのエポックを作った年である。この年に厚木キャンパスが開学され、同時に国際政治経済学部が創設された。当時、英米文学科は高水準の英語教育の伝統をもち、当学科への入学生の大半は女子学生であった。「青山学院大学厚木開学ニュース」第１号で大木金次郎院長・理事長は、新設学部によって変わる本学のイメージと、変わらない建学の精神を次のように述べている。

> この新設学部は、英語を専門とする男子学生を集めて、その上に国際政治、国際経済および国際経営に関する専門家を各々50名づつ養成しようという意図をもって作るわけであります。……従来の本学に対する世評はとかく女子大学のイメージがかなり強く働いていますし、元来、英米文学科以外の全学部の中にも相当数の女子学生が在学していますから、新設学部の大部分を主として男子学生に限定しても決して女子学生軽視にはなりません。……本学はキリスト教による人格の練成をするという建学の精神を堅持していることもまたよく理解した上での受験生が多く集まることを期待しています[1]。

ここに示された青山学院大学の女子大イメージとキリスト教による人格教育という建学の精神については、青山学院の歴史を丁寧にみていく必要がある。本学院の創立記念日は11月16日である。毎年、創立記念礼拝が守られ、学院に関わる人々にとってその日を忘れることはできない。しかし、一体いつ、どのような経緯でその日を創立記念日として定めることになったのだろうか。先の厚木開学ニュースでは、女子部の青山女学院が1927年４月に男子部の青山学院と合同し、「創立50年記念式の前後に第６代の阿部義宗院長の手により、それまでの男子部の創立記念日を女子部のものに変更した」と記されている[2]。つまり、現在の青山学院の創立記念日は女子部門が始まった1874年11月16日に由来し、キリスト教女子教育の伝統の上に成り立っている。

いわゆるミッション・スクールは女子教育のパイオニアとして、近代日本の教育界をリードし、女性の地位の向上と教育機会の普及に先駆的役割を果たした。本稿では、青山女学院のケースから、伝道の必要から開始された女子教育がメソジストの女性宣教師に

よってどのように目論まれ展開され、どのような女性が生み出されたのか、また、青山女学院の教育にかかわった女性宣教師と日本人教師が、女性の家庭・職業・経済的自立について、どのような意見を持っていたのか、さらに、キリスト教各派共同による宣教師主導のキリスト教連合女子大学運動が進展し、日本の女子高等普通教育の要望が高まる中で、東京の高等女学校のネットワークにおいていかに婦人問題研究が進められたのかについて論じる。

1．19世紀アメリカにおけるメソジスト・ウーマンの働き

1.1　アメリカメソジスト監督教会の組織体制と女性の聖職観

アメリカのメソジスト派が英国国教会から独立したのは1784年である。その年のクリスマス年会において「メソジスト監督教会」が確立し、トマス・コークと共にフランシス・アズベリーが最初の監督に選ばれた。18世紀末の広大なアメリカの地理的空間への伝道に際し、メソジスト派はイギリスと同様、巡回制を採用し、中央集権的な組織体制を着実に樹立した。アメリカ全土はいくつかの地区に分割され、地区年会が数個の巡回区から成る地区全体を統括する。地区年会の上位には、４年ごとに開かれる総会が設定され、「総会・地区年会・四季会」が行政機能を持つものとして、「合同ソサイエティー（united societies）・ソサイエティー・クラス・バンド」という一連の集団を統合した。

男性中心の教会行政に対して、男性と同等の資格が女性サイドから要求されるようになるのは、19世紀中葉のことである。1869年にマーガレット・コット（Margaret V. Cott）がメソジスト監督教会で地方説教者の資格を得たことが契機となって、４年ごとの総会や地区年会で女性投票権に関する議論が活発化した。1888年に総会に正式派遣された４～５名の女性のうちの一人が、ロックリバー・カンファレンスから参加したフランシス・ウィラード（Frances E. Willard, 1839-1898）であった。総会における女性平信徒の投票権への反対は根強かったが、1906年にようやく承認された。

ウィラードは女性キリスト教禁酒同盟（1874年結成）の会長を1879年から1898年まで務め、アメリカ社会における女性参政権の熱心な唱道者であったことがよく知られている。禁酒法成立に向かう運動において、ウィラードは家庭保護キャンペーンの一貫として女性の参政権を訴えた。女性キリスト教禁酒同盟のスローガンは「神と家庭と母国のために」であり、全世界が家庭のようになることが彼女の目標であった。ウィラードの聖職観は、バーバラ・ウェルターの「真の女らしさの信仰」のレトリックで説明される。彼女にとって聖職とマザーフッドは矛盾せず、牧師職は「母の仕事」として捉えられた[3]。

1.2　アメリカメソジスト監督教会の女性組織とディコネス運動

メソジスト監督教会の女性グループは、19世紀後半にメソジスト監督教会女性海外伝道協会（The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church;

WFMS)、並びにその相補団体として、女性国内伝道協会（The Woman's Home Missionary Society of the Methodist Episcopal Church; WHMS）を組織している。1869年に創設されたWFMSはメソジスト監督教会の親協会からの経済的援助を受けない形で独立した活動を開始する。設立されて１年も経たないうちに、インドにイザベラ・ソバーン（Isabella Thoburn）とクララ・スウェイン（Clara Swain）の２名の独身女性宣教師が派遣された。1874年には同じく独身女性のドーラ・スクーンメーカー（Dora E. Schoonmaker, 1851-1934）が日本に派遣され、５年間献身した。

他方、1880年に結成されたホームベースのWHMSは、海外の異教世界だけでなく、国内の新規移民の置かれた状況に目を向け、東欧・南欧などからの移民の密集する地区で支援活動を行った。奉仕した女性はディコネス（deaconess）と呼ばれ、聖書の典拠はローマの信徒への手紙16章1-2節である。パウロはケンクレアイの教会の奉仕者として大きな役割を担ったフェベをディアコノス（diakonos）と呼び、「多くの人々の援助者」とみなした。ケンクレアイはコリントの東方にあるエーゲ海に面した港町で、不道徳な地域であった。フェベが病人や痛みのある人々になした奉仕は、後のメソジスト女性によって19世紀後半アメリカの都市産業社会における奉仕の模範と捉えられた。メソジスト監督教会において正式にディコネスが法制化されたのは、1888年のことである。総会では、ディコネスの務めを次のように規定している。

> ディコネスの務めは貧しい人に仕え、病人を見舞い、臨終の人と共に祈り、孤児の世話をし、さまよう人々を探し、悲しみにある人々を慰め、罪人を救い、さらに、一般的な方法で没頭する他のすべてのことを斥け、自らの賜物にふさわしくキリスト教のわざに献身することである。(略）[4]

1889年のディコネス・カンファレスでは、入会とサポート・服装・入会許可などの規定が決議された。以下は服装に関する内容である。

> 服装
> 我々はすべてのメソジスト監督（教会）のディコネスが独特な制服を着用することを推奨する。
> 制服の色は黒であること。
> ガウンは装飾ひだで飾らず、ひだをとったスカートあるいはギャザー・スカート、丸みのある身ごろ、カフスのついた司教袖で作られること。
> リンネル地の襟とそで口、もしくは無地で地味なルーシュを用いること。
> 髪はさっぱりとすること。
> 宝石は襟にピンとかブローチ以外身につけないこと。
> 外出用の上着は長い田舎風の外套であること。

白いひもを用いて規定の形の黒い帽子を身につけること。
看護婦のディコネスの作業着は青と白のストライプの薄織リンネルで、普通の看護婦の帽子とエプロンを身につけること。
夏用の服は黒のシャツ織で、規定のスタイルで作られること[5]。

ディコネスは独身で、ディコネスホームで共同生活をし、派手な装飾品は身につけず、一定の服装を着用して無償奉仕を行った。第一次世界大戦後になると、「フラッパー」の生活スタイルが広がり、ディコネスの新しいモデルが示されるようになる。つまり、共同生活の理想から離れてディコネスホームは閉鎖され、ディコネスは独身、既婚にかかわらず、女性の伝道奉仕者を意味する言葉として用いられることになる[6]。

第一世代のディコネス運動を牽引したのは、ルーシー・ライダー・マイヤー（Lucy Rider Meyer, 1849-1922）である。マイヤーはオバリン・カレッジ及びフィラデルフィアの女子医学校で教育を受けた後、ヴァーモント州のトロイ・カンファレンス・アカデミーの女性校長、イリノイ州のマッケンドレー・カレッジの化学の教授を歴任し、豊かな教育経験を有していた[7]。彼女は女性が伝道と奉仕に必要な技術やリーダーシップを訓練する必要があると判断し、1885年にシカゴ・トレーニング・スクールを開設した。この学校は、シカゴの都市伝道・家庭伝道だけでなく、海外伝道のための指導も行った[8]。

このシカゴ・トレーニング・スクールで訓練を受けた後、日本に派遣され、1887年から1892年に海岸女学校及び東京英和女学校で音楽の教鞭を執った女性宣教師が、メアリ・ヴァンス（Mary A. Vance, 1858-1892）である。ヴァンスはシカゴの音楽学校を卒業した後、８年間アイオワのバーリントンで教会オルガニストを務め、メソジストのシカゴ・トレーニング・スクールで２ヵ月訓練を受け、29歳の時、日本に到着した。その３年後、男子系の東京英和学校で心理学・論理学・演説法・弁証学を教えていたメソジスト宣教師のジョン・ベルナップ（John F. Belknap）と結婚した[9]。翌年、一女を得たが、子どもが１歳にならないうちに、34歳で天に召されている。宣教師夫妻のホームは日本人クリスチャンにとってはまさしくモデルとなるものであったが、日本で結婚した女性宣教師が経験する出産・育児の伴う海外伝道はいのちがけのものであったことを物語っている。

２．19世紀後半のメソジスト監督教会女性海外伝道協会の日本伝道

2.1　バイブル・ウーマンの養成とクリスチャン・ホームの形成

日本における初期のキリスト教学校は日本伝道の必要から宣教師の教育活動として始まった。WFMSの場合、1874年11月16日にスクーンメーカーによって女子小学校が開かれた。翌年、救世学校に改称し、1877年に築地の校舎に移転して海岸女学校となった。当学校は東京ホームと呼ばれ、この場所が伝道と教育の拠点となり、寄宿舎学校だけでなく、日曜学校、バイブル・クラス、婦人集会などを通して伝道活動がなされた。スクーンメー

カー校長時代の海岸女学校の一つの目標は、家庭性に裏づけられた有能なクリスチャンの母・妻を創出することにあった。1879年のスクーンメーカー帰国後の様子は、第３回メソジスト監督教会婦人年会記録（以下、年会記録）[10]のアンナ・アトキンソン（Anna P. Atkinson）、レベッカ・ワトソン（Rebecca J.Watson）、マチルダ・スペンサー（Matilda A. Spencer）の報告からうかがえる。そこでは家政を担うよき家庭人の育成に加えて、能力あるクリスチャン・ワーカーの養成が目指されている。

日本人教職者及び補助者の養成に関し、当時、女性の牧師は存在しなかったことから、日本メソジスト監督教会婦人年会は女性の伝道者養成学校として1884年に聖経女学校（横浜女子伝道学校）を開校した。その学校は英語名でDeaconesses' Training School, Training School for Bible Womenと呼ばれ、ディコネスとバイブル・ウーマンは同義語として用いられている。元来、インド・中国といったアジア伝道におけるディコネスの使命は異教地の「残酷な慣習を打破し、重荷を取り除く方法を同性の婦人達に教えること」であり、トレーニング・スクールはそれに従事できる女性、また、デイ・スクールの教師を育てるところに主眼があった[11]。

ヴァンスが来日した年の第４回年会記録（1887年）をみると、音楽伝道と教育を通しての彼女への期待をみてとることができる。第７日目の午後のセッションでヴァンスはシカゴ・トレーニング・スクールの方法に従って、教育的な聖書朗読を実施した。この時、「バイブル・ウーマンの務め」と題して、聖経女学校の直近の卒業生の稲垣夫人（Mrs. Inagaki）の講話もあった。また、バイブル・ウーマン委員会では、１．我々の学校では禁酒、教会史、教会自治、神学上の主要な質問に関する実践的な指導を与える講義コースを確立すること、２．音楽を重要な伝道手段として認識しながら、より体系的な音楽教育を与えること、３．編み物や装飾作業が（クリスチャン）ワークへの有用な付属物として定期的に教えられること、４．実用的である限り、適切な図書館が備えられ、女性が日本で入手可能な文学・宗教の定期刊行物を読むよう奨励されること、５．バイブル・ウーマンのための教育課程が毎年、議事録で公表されることを決議している[12]。

第５回年会（1888年）のバイブル・ウーマン委員会では、レギュラー・コースの卒業生はディコネスとして推薦され（決議２）、積極的なクリスチャン・ワークに従事したディコネスは１年の経験を経た後、婦人年会のメンバーとなること（決議６）が決議されている[13]。1890年には「日本メソジスト監督教会婦人年会規約」の第２条で、「その目的は、女性海外伝道協会の代表者、親伝道局の女性、日本人ディコネスが協力して、日本の女性と子どものために最善可能な利益に資することである。」[14]と規定された。

ヴァンス没後115年を経た2007年から2008年に遺族から青山学院にヴァンス書簡集の寄贈があり、そこには日本メソジスト監督教会婦人年会の追悼礼拝（1893年）におけるチャペル夫人（Mrs. M.F.Chappell）[15]の追悼文も収められている。以下の言葉から、生徒の心に刻まれたヴァンスの人柄が偲ばれる。

最愛の教師の特長について、セミナリーの若き女性は次のように述べています。それは、教室での公平さ、実際的な思いやり、生徒が前進することへの大いなる願望、聖書授業の準備の忠実さ、思い描く標準に至らない生徒に対する忍耐強さ、強いセルフ・コントロール、謙遜、寛大な精神、日曜学校のワークの熱心さ、人々のために労苦した熱烈な愛です[16]。

ところで、教育勅語の発布後、1890年から1894年にかけて、キリスト教女学校は「従来の伝道者養成を強調した教育目的から、より一般的な良妻賢母養成の目的に切り変え」たといわれている[17]。第８回年会（1891年）をみると、「日本メソジスト監督教会婦人年会規約」第２条は「日本人ディコネス」の語を削除し、「親伝道局の女性と女性海外伝道協会の女性が協力して、日本の女性と子どものために最善可能な利益に資することである。」[18]に変更されている。

その後、高等女学校令が私立学校令と文部省訓令第12号と同じ年の1899年に制定されると、天皇制国家体制下において良妻賢母主義教育が推進された。この時期にメソジストの伝道方針としてミッション・スクールによるクリスチャン・ホームの形成がより強く打ち出されている。それは、遺愛女学校長オーガスタ・ディッカーソン（Augusta Dickerson）の「伝道地における学校」（第16回年会記録）から読みとれる。女性宣教師にとってデイ・スクール、幼稚園は教育機関である以上に宗教機関（a religious agency）であったが、1880年代に開設された五つのデイ・スクールのうち３校が文部省訓令第12号発布後廃止され、1893年開園の幼稚園も同時に廃園されている。他方、東京では三田、四谷、青山に母の会が形成され、三田はファニー・ウィルソン（Fanny G. Wilson,）、青山はチャペル夫人（Mrs. B. Chappell）、四谷は両人が協力指導した[19]。

この反動の時代に、東京英和女学校及び青山女学院を経て1896年から名古屋清流女学校で校長を務めたエリザベス・ベンダー（Elizabeth R. Bender, 1858-1942；青山女学院長1902-3）は、「寄宿舎学校後、日本の少女のために何が（必要か）」（第16回年会記録）について語り、クリスチャン・ホームで営まれる崇高な生活と献身を求めた。アメリカでは実際にできないと断りつつも、「クリスチャンの少女たちが10人中９人でないとしても、大半のケースで未信者と結婚するならば、我々の仕事は無に帰したということになる。なぜなら、私が見たところ、このような場合、クリスチャンの少女たちは結局、信仰を失ってしまうから。それで、ある程度、我々の少女の結婚を我々がコントロールすることが重要となる。」と述べている[20]。

2.2　青山の最初の校友モデル　―小崎（岩村）千代―

アメリカの母言説には四つのタイプがあり、アメリカにおいてそれらは時代と共に順次進行している。19世紀初頭に、第一のタイプの生物学的な母に対して、母になることの意味や責任が問われ、家庭空間を超えて、第二のタイプとしての「共和国の母」が登場する。

すなわち、子どもを育てる養育者、また、子どもの有無にかかわらず、教師や道徳的指導者となることが求められた。次の1880年までには、第三のタイプの「改革主義者としての母」が生み出され、宗教団体や道徳改革団体を通して社会改善運動が推進された。その後、1880年から始まる40年間に女性は政治的な母として、禁酒法の成立や女性の参政権の確立に向かう運動を展開した[21]。この四つのタイプのうち、第二から第四のタイプへと突き抜けていく時代を生きたアメリカのメソジスト女性が、ウィラードである。

他方、日本に来日した女性宣教師は1880年代1890年代を通じて、およそ第二及び第三タイプの母を日本人クリスチャン女性の理想として示した。スクーンメーカーの日本伝道から半世紀を経た1924年の『日本メソジスト監督教会婦人年会概要』に、「青山の最初の生徒のライフ・ストーリー」と題する記事がある。「卒業式で青山女学院の卒業生の熱意あふれる面白い顔ぶれをのぞきこむ時、『現在在籍する1000名の学生と、こうした卒業生の中からどれくらいの人が明日の改革運動のリーダーになるのだろうか？』という思いが生起してきました。その時、我々の勇気を強めるために、本校の始まりに遡ると、卒業生の多くの素晴らしい人生が我々の心によみがえってきました。50年を振り返り、後に禁酒運動と他の重要な運動で際立つリーダーとなった一人の少女について、語ってみましょう。」[22]という言葉で始まる記事は、スクーンメーカーの最初の生徒７名の内の一人の岩村千代（1863-1939）を取り上げている。

1863年に生まれた千代は、12歳の時、スクーンメーカーから福音と異文化ともいえるアメリカのホームについて教えられ、ジュリアス・ソーパーから洗礼を受け、キリスト者となった。その後、小崎弘道（1856-1938）と結婚し、クリスチャン・ホームを形成し、福音伝道者としての役割を担った。千代のケースは初期のキリスト教女子教育を受けた代表的な校友モデルである。

千代の夫の小崎は熊本バンド出身で、1879年に同志社英学校を卒業した第１回生である。卒業後、東京で霊南坂教会の基礎を築き、その後、京都で1890年から1897年まで同志社社長を務めた。新島襄のキリスト教主義教育について、同志社を伝道者養成のための学校とみなす宣教師と、教育のための機関であるとする日本人教師が対立し、小崎はアメリカンボードとの関係を円満に解決できず苦しんだ。同志社辞任後、小崎が招聘された東京の京橋教会は1899年に霊南坂教会と合併し、彼は留岡幸助の後任として霊南坂教会で牧会し、長男道雄が副牧師を務めた。長女の安子は岩村の姓を継承し、日本基督教保育連盟（1931年成立）の初代会長・理事長としてキリスト教保育界をリードした。

霊南坂教会時代の千代は1903年当時、婦人矯風会（1886年設立）の文書課長として『婦人新報』を主幹している。1900年前後からメソジスト女性宣教師によって主導された青山母の会や三田母の会は日本母の会同盟へと発展し、千代は本同盟の事業を支えた。その後、青山女学院同窓会の会長を引き受け、1921年に矢島楫子の後、矯風会会頭に就任した。加えて、海軍軍縮会議に向けて、平和を求める日本女性の１万人の署名を携えてワシントンに赴き、ホワイトハウスでハーディング大統領にその署名を手渡した。

いわゆる1920年代は西洋文明の優位性に対する反省に立って、宣教師が日本人と対等な関係で友情を結び、民主主義に裏づけられた社会へと向かった時代である[23]。クロティルダ・マクダウェル（Clotilda L. McDowell）はWFMSの機関誌である『ウーマンズ・ミッショナリー・フレンド』で、世界平和と世界親善、よき法の制定と施行、世界の青少年の保護と安全、世界正義の確立のために、「世界キリスト教女性連合」のネットワークの推進を決議したことを報告する際、千代の功績について、次のように称えた。

> 長い間、神の恵みに満たされてきた一人の小さな日本女性が、我国の大統領の前につつましく立ち、１万名以上の署名の入った巻物を大統領に差し出して、次のように述べたのは、数か月前のことです。「大統領殿、私は日本女性が平和を望むことを、軍縮会議のために集まる男性とあなたに伝えようと、我国からこれを持ってまいりました。日本女性は女性に広くドアを開いて、世界を人類に対する心安まる場にしてほしいと願っています。」[24]

千代の生き方は「共和国の母」に裏づけられた女性像を超え、婦人矯風会の活動や平和運動にみるように、「改革主義者としての母」の側面も有している。

３．キリスト教女子高等教育の確立と拡大要望

3.1　キリスト教連合女子大学運動

20世紀に入って伝道と教育の関係は大きく変化する。1903年に公布された専門学校令によって、翌年、女子専門学校として認可を受けた学校は日本女子大学校・女子（津田）英学塾・青山女学院英文専門科である。宗教面においては、1905年に日本YWCAが発足し、その２年後に英文専門科学生を中心に青山学生YWCAが結成され、活発な宗教活動が展開された[25]。この時代の青山女学院の教育に尽力した日本人教師として、舟橋雄を挙げることができる。舟橋は1873年生まれで、青山学院高等普通部を修了した後、アメリカのメソジスト系大学であるシラキュース大学、ボストン大学で英語・英文学を専攻した。帰国後、青山学院に奉職し、品性ある家庭的な女性にとどまらないより自由な生き方へ向かう女子教育を志向し、英文専門科出身者の教職という職業領域への進出を促した。1907年から1914年まで青山女学院の高等普通科教頭として活躍したが、1920年の英文専門科の廃止と共に教職を退き、学院の理事に就任している[26]。

さて、日本におけるキリスト教大学構想は開教五十年記念会（1909年）、並びにエディンバラ世界宣教会議（1910年）で超教派の総合大学の設置が提案されたことが契機となっている。開教五十年記念会は文部省訓令第12号発令の10年後の開催であり、10月５日から10日までの６日間、テーマ別に分かれて第１講演会から第10講演会が行われた。女性をめぐる伝道と教育の問題は10月７日の第４講演会において議論され、『開教五十年記念講演

集　付祝典記録』には以下の13の講演が採録されている。

イー、タルカット嬢	婦人伝道学校
シー、ダブリユ、バンペテン夫人（横浜聖経女学校長）	婦人伝道者に就て
本多貞子	教会に於ける婦人会
アイ、エム、ハーグレーブ嬢	婦人伝道者の地位と其事業
チロツテ、ビ、デフオレスト嬢	女学校生徒の日曜学校事業
稲垣スエ子（横浜聖経女学校教師）	未信者に対する伝道事業
ジー、ビー、ピアソン夫人	未信者に対する伝道事業
エヌ、ビー、ゲーンス嬢（広島英和女学校長）	ミッション女学校
スーサン、エー、ソール嬢（神戸女学院）	ミッション女学校
アミイ、ジー、ルイス嬢（青山女学院長）	ミッション女学校に就て
和久山キソ子	開教五十年以来宗教事業としての幼稚園及び小学校の略史
グラデイス、フィリップス嬢	普通女学校の学生間に於ける伝道事業
ジョオージアナ、ボーカス嬢（常盤主筆）	基督教文学[27]

この講演会で、青山女学院長のエイミー・ルイス（Amy G. Lewis, 1874-1934）は20数年の間に、キリスト教女学校の教育によって日本の女性に生まれた変化について、日本女性の中に純潔で愛情の上に築かれる家庭観を醸成したこと、結婚しないで教育事業や博愛事業に献身する女性のライフ・コースが求められるようになったこと、男女交際のルールが浸透したことを評価し、さらに女性の能力を発達させるために女子高等教育が必要であることを力説した[28]。

翌年、エディンバラ世界宣教会議では、具体的に「女子高等教育については目下、できれば二つのキリスト教学校を必要とする。その一つは当然東京に置かれるべきである。他のキリスト教女学校は現段階ではこの２校の行う高等教育（the higher grade）の事業に着手すべきではない。」と決議し、その後すぐに、ジョン・モット（John R. Mott）を委員長とする継続委員会が設置された。1911年にはその可能性を調査するための特別委員会が組織され、調査報告書は「一つの連合大学は数多くの小さな学校がかける費用よりも平均して少ない費用で、極めてよりよい方法で備えることができる。」という見解を示し、「共通の信仰の本質的一致」の前進を強調した[29]。それを受けて、1912年12月にアメリカにおいて正式に促進委員会が再編され、日本で女学校を経営している10のプロテスタント各派教団から外国人、日本人１名ずつ、代表者が選出された。青山女学院からは、1914年５月に校長に就任したアルバータ・スプロールズ（Alberta B. Sprowles, 1872-1859）が委員として出席した。最終的に６ミッションが支援し、その傘下にある女学校が協力して、1918年４月に新渡戸稲造を学長、安井てつ（1870-1945）を学監とする東京女子大学が開校した。

キリスト教各教派の内側の動きに関する限り、各キリスト教女学校が高等科・専門科を

廃止して、卒業生を新しいキリスト教女子高等教育機関に送るという犠牲の伴うものであったため、後ろ盾を必要とした。日本全国のキリスト教女学校はネットワークを結び、日本基督教女子教育会（1913年10月４日成立、その母体は京浜基督教女子教育会）を組織した。スプロールズは日本基督教女子教育会第４回大会の副会長を引き受けた。本教育会はキリスト教連合女子大学運動の成功にとどまらず、青年の男女交際問題を取り扱い、男女交際法の標準となるものを調査し、日英両文で小冊子を作成することや男子の基督教々育同盟会と共同委員会を組織することなどを話し合っている。その後、日本基督教女子教育会は東京女子大学が成立した後、男子系の基督教々育同盟会（1910年４月６日組織、現在のキリスト教学校教育同盟の前身）と1922年に合併した。日本基督教女子教育会の最後の第10回大会で副会長の任にあたったのは、1914年４月に青山女学院高等女学部（高等普通科改称）教頭に就任した塚本はま（1866-1941）であった[30]。塚本は1911年以来、青山女学院の家事・国語・修身を担当し、1923年まで奉職した。1920年に英文専門科を失った青山女学院は、翌年、高等女学部専攻科として２年課程の家政科を置いたが、スプロールズを助け、この運動を支援した塚本の役割は大きかった。

創設時の東京女子大学は予科１年、本科３年の英文科、人文科、国語漢文科、実務科を置き、さらに、専修科２年が設置されている。開校時に安井が「新設東京女子大学に就いて」という題目で、YWCAに発表した記事をみると、東京女子大学が新しい試みとして設置した人文科について、「この科は頭脳のある常識の発達した人格の高い淑女を養成するのが目的で、職業的教育を授けて将来独立の生活をしやうとする目的よりも、寧ろ一家の主婦となるのに充分の素養を作り度いと希望する人に適します。」と述べる一方、実務科では「第一部は商業の知識を持つ人を養成します。」「第二部は工場の監督者或は慈善事業に関する重な働き人を養成します。」と説明している[31]。

本科の入学者内訳は、人文科８名、国語漢文科11名、英文科42名、実務科７名となっている[32]。女性にキリスト教に基づく高等普通教育の機会を提供することを基本に、東京女子大学はいわゆるリベラル・アーツ系カレッジとして展開した。女子大が開校された年の『ウーマンズ・ミッショナリー・フレンド』には、「東洋の女性の解放」という記事が掲載され、新しい女子大学におけるキリスト教人格教育の意義が強調されている。次のように記されている。

> 新しい連合女子カレッジの学長である新渡戸稲造は、日本における婦人運動とキリスト教を次のように説明する。「これまで東洋では、人格がほとんど重要視されてきませんでした。私たちは集団という人間関係でものを考えます。ほとんどの人がおそらく人格といったようなものがあることを認めるでしょう。しかし、それは完全に男性のものであると主張することでしょう。女性は自分たちには何もないと言うでしょう。経済上の女性の地位は全く剝奪されており、決して独立していません。女性は単に家庭内のメンバーでしかありません。すなわち、娘・妻・母・未亡人です。キリス

ト教はまさにこの考えを断ち切り、個人の責任と自由に重きを置きます。故に、キリスト教は女性の新たな価値を私たちに与えています。」[33]

3.2　女子高等普通教育の拡大要望

1910年代後半は高等女学校が量的に拡大し、高等女学校程度以上の教育について、それに即した職業教育の在り方が問われるようになった。1917年開催の第１回全国高等女学校校長協議会において、東京の女子教育関係者が中心となって、「女子高等普通教育の向上、専門教育の拡充、帝国大学の門戸開放、官立女子大学の設置など、男性と対等な高等教育の問題が論議され」ている。こうした女性の高等普通教育への拡大要望に対して、同年、岡田良平文相は「高等女学校程度で満足してよいと思ってゐる」、「経済上女子に独立の職業をとらせなければならぬ様になるか何うかそれは分からないが此事は……理想とすべきでないものに対し準備をすることは要らぬ」と発言した[34]。これに対して、一人の女性が『婦人の自覚』と題して、YWCAの機関誌に投稿している。

私は女子も男子と同様に高等教育を授けて然るべきものと思ひます、……私は男子と同様女子も人間である事を主張する、家庭に於ける責任は、男子の社会に於ける責任と同様、寧ろそれ以上に重大なものである事を高唱する、何となれば第二の国民は家庭より出づるのであつて、大学者大宗教家も皆母より生れるのである、無教育な愚かな母に賢なる子供を望むのは間違である。

私は決して独身論者ではない、寧ろ男女は結婚に依つて一体となるべき者である事を主張する者であるが、女子も男子と同様高等普通教育以上に職業教育を必要と思ふ、……

もう少し世間の人が女子といふ者を了解し、無暗に屈伏せしめず、男子と同様に教育の自由を与へ、人としての向上発展を計らしめたならば、社会の改良は云はずして行はれ、国家社会の為め、広くは世界人類の為め非常に幸福な事と思ひます[35]。

ここでは、女性の領域である家庭における役割と責任を自覚しつつも、社会改良、国家・世界人類の発展をも視野に、男子と同等の高等普通教育機会の確立と、新しい青年女性のための（専門的な）職業教育の必要性が主張されている。

3.3　高等女学校同窓連合会における婦人問題研究

超教派の東京女子大学の設立方針が決定し、青山女学院が1920年に英文専門科を完全に廃止するまでの間[36]、キリスト教学校を超えて、高等女学校程度以上の学校が結集した同窓連合会の研究活動について触れたい。第１表は、1918年に始まる青山女学院校友会の参加への呼びかけから、高等女学校同窓連合会の成立を経て1919年までに展開された内容を筆者がまとめたものである

表１　高等女学校同窓連合会（1918-1919年）

日　時	集　会	場　所	座長・議長・委員長	内　容	青山女学院校友会	備　考
1918（大正７）年秋	呼びかけ		発起人：安井てつ（東京高等女子師範）、羽仁もと子（府立第一）、塚本はま（東京高等女子師範）、井上秀子（日本女子大）	東京市内の高等女学校程度以上の女学校同窓会の連合会組織の提案	校友会役員会にて加入を協議、代表者会に舟橋雄、小崎千代（校友会会長）、大平つぎ子（校友会副会長）、松岡久子を選出	湯原元一（東京女子高等師範）及び成瀬仁蔵（日本女子大）の賛同
1918（大正７）年10月10日	発起人及同窓会代表者の会	東京女子高等師範学校桜蔭会館	議長：（前半）安井、（後半）宮田修（成女高等女学校）	開会の辞：井上 連合会組織の理由及び必要（井上、塚本、羽仁）と演説（佐方鎮子［神田高女］、三谷民子［女子学院］、三輪田元道［三輪田］、市川源三［府立第一］他） 規約起草委員の選出：市川、武藤忠義（府立第二）、塚本、井上、安井、羽仁、三谷、小崎、佐方、井出（実践）、馬上孝太郎（学習院）、蟹江（女子英学塾）	小崎、肥田すぎ子、松岡、舟橋出席	37校70名以上出席
1918（大正７）年10月20日（もしくは28日）	規約起草委員会	日本女子大学校家政館		目的：１．同窓会相互の気脈を通じて、懇親を温むること、２.一致協力して家庭生活の改善を図り、婦人に関する諸問題を考究すること 構成：同窓会から代表者２名。委員の任期は１年、半数改選。同窓会又はその母校たる女学校より相談役１名	松岡、舟橋（小崎の代理）出席 当規約により、舟橋は相談役となる	15名出席（起草委員の他、成瀬、山脇房子［山脇］、穂積［女子大］、河野［女子大］）
1918（大正７）年11月９日	第１回代表者会	三輪田高等女学校	議長：宮田	規約承認 会費は一時創立費として各校十円を出すことを決議	松岡、舟橋出席 加入誓約については、校友会役員会での決定後とした。（11月20日に正式に加入決定、代表者は役員会での決議なしに賛否を決める自由をもつことも決定）	25校約40名 新設の東京女子大学は同窓会がないため、安井は個人として参加
1918（大正７）年12月７日	第２回代表者会	双葉高等女学校	議長：塚本	組織の具体案として、四つの委員会を設置し、委員を選出（下線部は委員長） 食物改良部：<u>井上</u>、他に２～３名 衣服改良部：<u>松岡</u>、石川しづ子、羽仁、近藤すゞ子、津下じつ子 思想研究部：<u>三谷</u>、舟橋、安井、黒崎えつ子 社交改良部：<u>羽仁</u>、福島、小崎、松岡	舟橋、松岡、平島君子（小崎の代理）出席	
1919（大正８）年１月16日	思想研究部委員会	女子学院	委員長：三谷	読書会、講演会、新刊書の紹介、家庭での研究会等を提案	舟橋出席	委員５名参加（三谷、舟橋、安井、黒崎、長谷川喜多子）
1919（大正８）年１月20日	食物改良部及び衣服改良部の委員会	日本女子大学家政館		食物改良部では、井上の指導の下、調理された米食節約料理の試食。衣服改良部では、１．子どもへの経済的服装（赤坊によい着物をきせないこと）、２．衣服の数を少なくする方針（下着の改良等）、３．普通外出着を銘仙程度にし度いこと、４．礼服の改良は次回の議題とすることを決める。	松岡出席	11名参加（安井、三谷、羽仁、長谷川、井上、近藤、柳八重子、金土、伍堂、黒崎、松岡）
1919（大正８）年２月１日	第３回代表者会	女子学院	座長：塚本	常務委員10名の選定 羽仁、安井、塚本、井上、福島、松田、神（府立第二）、岡本（女子英学塾）、水野（学習院）、寺尾（府立第三）	肥田、貴田、舟橋出席	宮田から新聞・雑誌を通して会の成立や主趣を発表し、各校に通知する提案が出される。今後、事務所を雑司ヶ谷上り屋敷の羽仁方とし、事務担当者を選定。
1919（大正８）年２月８日	第４回代表者会	女子学院		相談役の中から常務委員を定める案は撤回。 思想部案の世話人として、青山から山内仁子と久万嘉寿恵を指名。 各委員会の報告 衣服部：羽仁報告、１．児童の洋服から日本婦人の服装を漸次改めること、２．形式に拘泥した服の着方を廃すること、３．社交的集会以外は常に質素を主とすること、４．児童に重い着物を着せず、七五三の祝着の類を廃止すること等の意見。 思想部：１．最寄りの学校又は家庭で研究会を催すこと、２.講演会を催すこと、		

				３．各校科外講演等の会員聴講料の減額、４．適当な書物を選ぶこと、５．各校の図書館の会員使用を許可すること、６．良書を読み、委員へ紹介すること。たとえば、文部省より通俗図書調査表の配付を受ける等の意見。 食物部：柳（井上の代理）報告１．米食代用品（麦及雑穀のパン）を紹介すること、２．各校で料理した弁当を生徒に供給することは不可能か？日本女子大で代食講習会を開催し、実費を会で負担する等の意見。		
1919（大正８）年３月29日	代表者会	東京女子高等師範学校桜蔭会館	座長：塚本	新卒業生歓迎会の打ち合わせ、講演会・裁縫講習会の計画報告	貴田、肥田、舟橋出席	
1919（大正８）年４月３日	新卒業生歓迎会	東京女子高等師範学校大講堂	司会：羽仁	新卒業生歓迎会 演説：市川・佐方・井上・塚本（洋服裁縫講習会の報告を含む）・安井・小橋三四子・三輪田之道・宮田・三谷（講演会報告を兼ねて）・倉橋惣三（講演予告を兼ねて） 岩田さと子鈴信子らの独唱又はピアノ		500～600名の会歌の合唱。 演説会の広告：倉橋惣三「児童の心理」（４月16日から４回）、吉野作造「開戦より講和まで」（４月22日から３回）、穂積重遠「婚姻と離婚」（５月10日から４回）、有島武郎「内部生活の現象」（５月21日から４回）、矢作栄蔵「物価の話」（６月５日から４回）
1919（大正８）年４月24日	思想部委員会	女子学院		委員が加入同窓会の母校を分担訪問し、講演・読書・研究その他の会合開催を勧誘し、出席の便宜を図る		
1919（大正８）年４月26日	読書会	青山女学院		舟橋雄講演会（英国現代作者ゴールズワージーの問題劇）、 第１回読書会	貴田を含む３名が思想部世話役となる	
1919（大正８）年６月21日	読書会	青山女学院パーラー		舟橋雄講演会（建築と装飾に於けるルネサンスの精神）、土生英子講演会（ブラックウェルス著「ロシア革命のおばあさん」の解題）、第２回読書会		会費10銭

（青山女学院校友会『会報』第22号［1919年７月］、102-127頁より、筆者作成。）

高等女学校同窓連合会成立の背景について、青山女学院の舟橋は、「戦争の為に起つた種々の現象の内に、生活の圧迫といひ、思潮の変動といひ、世界中に瀰漫した社会改造の叫びといひ、孰れも我々をして惰眠を貪らしめず、特に教育ある女子の研究を要する問題や、実行しなけれならぬ方法が種々と増えて参りました。かゝる機運を察して、東京市内の各高等女学校や、夫れ以上の学校の卒業生を糾合して、何等か彼等の及ぶ範囲に於いて現代社会に貢献するあらんとして起つたのが、昨年の秋から屢々話しのあつた高等女学校同窓連合会なるものなのです。」[37]と説明している。

高等女学校同窓連合会は1918年10月に安井てつ（東京女子高等師範卒）、羽仁もと子（府立第一卒）、塚本はま（東京女子高等師範卒）、井上秀子（日本女子大卒）が発起人となり、東京市内の高等女学校程度以上の女学校同窓会の連合組織を提案した。青山女学院からは代表として、校友会会長の小崎千代、副会長の大平つぎ子（代表者会には代理として肥田すぎ子が出席）、松岡久子（1902年高等科全科卒）[38]及び教師の舟橋が選出された。翌月、青山女学院校友会は正式に加入決定した。

本会の目的は、第一に、「同窓会相互の気脈を通じ、懇親を温むること」、第二に、「一

致協力して家庭生活の改善を図り、婦人に関する諸問題を考究すること」に置かれた。松岡は当時、米騒動など不安的な社会情勢の中で行われた本連合会を、教育を受けた女性の協力による生活運動と位置づけている[39]。本会に東京女子高等師範学校長の湯原元一や日本女子大学校長の成瀬仁蔵が賛同を示し、東京府立第一高等女学校長の市川源三などが参加していたことは、日本の女子高等教育の制度化への要望を反映するものであったともいえる。

事業内容は、食物改良部、衣服改良部、思想研究部、社交改良部の４種類に分割され、食物改良部は家政学科を設置した日本女子大学校の家政館を会場に研究報告がなされている。衣服改良部は羽仁や松岡の活動が目に留まるが、子どもの経済的服装や女性の合理的な着物・洋服の推進の背景には塚本の生活改善思想の影響がうかがえる。思想研究部では青山女学院で舟橋を中心に英文学に関する講演会や読書会を開催している。そこで取り上げられた作品の一つは1909年から1915年までに書かれた、ジョン・ゴールズワージー（John Galswothy）の問題劇（Problem Plays）である。イプセンの影響を受けて、英国文学の現代劇に登場する人物は英雄ではなく、普通の人を特長とし、テーマとして独立する婦人の自覚、資本家と労働者の争闘、慈善の失敗などが扱われ、女性の自我や社会を見る目を養うものであった[40]。その他、倉橋惣三、吉野作造、有島武郎などを講師とする連続講演会も企画され、各分野の思想潮流に触れる機会が提供された[41]。

おわりに　―安井てつと塚本はまの比較から―

メソジスト女性宣教師の日本伝道方針においてバイブル・ウーマンの養成からクリスチャン・ホーム形成へとシフトする1880年代90年代を経て、20世紀転換期のキリスト教連合女子大学運動による東京女子大学の成立、青山女学院英文専門科の廃止に至るまでの時代を中心に考察してきた。

千住克己によれば、近代日本の女子教育には三つの型がある。第一に教養中心の人間教育に主眼をおくもの、第二に家政的実科技芸を中心とするもの、第三に家政的実科の技芸を、豊かな教養を裏づけとする科学的・合理的知性をもって処理していこうとする三つである[42]。

東京女子大学学監となった安井の場合、第一の型に属し、リベラル・アーツに重きを置く、キリスト教に基づく人格教育を行なった。東京女子大学の教養主義は理念的にジェンダーに縛られず、精神を自由にし、主体的な人格を形成する教育を基本とする。ここには安井の職業教育に対する警戒や学問観が反映している。それは、東京女子大学で栄養科設置案が浮上した時、安井の反対により不発に終わったエピソードに例証される。

天達文子の「栄養科主任事件」によれば、天達は東京女子大学卒業後、マウントホリヨークで生物学を学び、その後、成城女学校に勤務していた1934年に、東京女子大学で常務理事を務めたオーガスト・ライシャワー（August K. Reishchauer）から食事の誘いを受け

た。訪問先にYWCAの外国人総幹事のエマ・カフマン（Emma R. Kaufman）と安井も招待されており、天達はライシャワーから東京女子大学の栄養科設置の計画を聞き、栄養科主任の話を持ちかけられた。それに際しては、カナダのトロント大学で栄養学、食品科学を学んではどうかというものであった。当時、YWCAには栄養科のようなものがあったが、その基礎が欠けていた。東京女子大学の栄養科設置案に対して、安井はその目的が経営上財政的なことからきていることに納得がいかなかったようである。その後、天達は栄養学校などを調べ、栄養研究所の佐伯矩宛紹介状を安井から受け取った。佐伯との面談の結果、32歳の天達が栄養学を究めるには10年を要することなどを知り、その報告を安井にしたところ、「一天くまなく晴れた感じで先生実に朗らかであつたし、私もえらくさっぱりした。」と天達は述べている。その後、東京女子大学の高等学部の学科編成で、栄養学食品科学等が組み込まれ、佐伯の高弟が担当した[43]。いわゆる1930年代当時、栄養研究は世界の食料問題と共に、科学的な研究を必要とし、女性の専門的職業を支えるだけの学問的基礎が未だ脆弱であった。

他方、東京女子高等師範学校を1890年に卒業した安井と同期の塚本は、第三のタイプの推進者である。家庭観、女性観、職業観に関する限り、塚本にとって家庭は女性の領域であったが、夫に依存することは退けられる。塚本は「経済上独立せる婦人」と題する講演で、女性の家庭性は経済的独立と両立するものであり、教育を受けた女性の精神的経済的自立を主張した[44]。塚本にとって職業領域は男女対等に開かれるはずのもので、お互いがパートナーとなって社会を形成するという見地から、「婦人職業の発達は男子の職業を奪ふためではない。相提携して、国家に尽したいといふ誠意に発するのである。」[45]と述べている。職業婦人の活躍を期待する塚本は、婦人の職業と家庭生活との両立を支持し、その基本を「簡易生活」に置いた。塚本はそれを「無駄のない生活」「能率のあがる生活」、「家庭の改善、弊習の廃止、虚栄、煩雑とをのぞいた意義のある、生きた生活」と説明し、家族の着物をはじめとする衣服の改良、食物の研究による食事の改善などを促した[46]。

最後に、女性の職業と自立について、20世紀初頭の学問発達とWFMSの国際連帯へと向かう運動の中で、メソジスト女性宣教師がどのような専門的職業教育観を持っていたのかを検討することは、青山学院の女子高等教育史研究の課題である。

註

1　『青山学院大学厚木開学ニュース』第１号（1981年３月）、５頁。

2　同上、3-4頁。

3　拙稿「アメリカメソジスト派の伝道戦略と女子教育―青山女学院の場合―」『教育研究』第65号（2021年３月）、101-102頁。

4　Russell E. Richey, Kenneth E. Rowe, and Jean Miller Schmidt eds., *The Methodist Experience in America: A Sourcebook,* Vol.II (Nashville: Abingdon Press, 2000), p.432.

5　*Ibid.,* p. 433.

6　前掲拙稿、103頁。

7　Mary Agnes Dougherty, *My Calling to Fulfill: Deaconesses in the United Methodist Tradition* (New York: General Board of Global Ministries, The United Methodist Church, 1997), p.39.

8　前掲拙稿、103頁。

9　ジャン・W・クランメル編『来日メソジスト宣教師事典　1873-1993年』（教文館、1996年）、17頁、275頁。

10　本節では*Minutes of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan,1886-1901*（青山学院資料センター所蔵）を使用した。

11　前掲拙稿、99頁、104頁。

12　*Minutes of The Fourth Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan* (Yokohama: Japan Publishing Agency of The Methodist Episcopal Church, 1887), pp.12-13.

13　*Minutes of The Fifth Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan* (Tokyo: Kokubunsha, 1888), p.15.

14　*Minutes of The Seventh Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan* (Tokyo: Kokubunsha, 1890), p.1.

15　正確にはMrs. M. B. Chappellと思われる。1890年にメソジスト宣教師のベンジャミン・チャペル（Benjamin Chapell）と結婚したメアリー・ホルブルック（Mary Holbrook）は、結婚後、年会記録でMrs. Chappellと記載されている。

16　*Dollie Vance and her Letters from Nineteenth Century Japan,* edited by Richard Jacobi (2007), p.53.（青山学院資料センター所蔵）本書簡集はご令孫のDr. Jacobiによって小冊子にまとめられたものである。表題紙には本国で親しまれた愛称Dollieの名が用いられ、少女時代の写真が掲載されている。内容はトピックに従ってタイトルを付して時系列に編集されている。全体で37通が収められており、巻末にはアメリカのヴァンス・ファミリーとその周辺に関する記載がある。

17　碓井知鶴子『女子教育の近代と現代―日米の比較教育学的試論―』（近代文藝社、1994年）、39-40頁。

18　*Minutes of The Eighth Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan* (Tokyo: Hakubunsha, 1891), p.1.

19　前掲拙稿、105頁。

20　*Sixteenth Annual Report of Japan Woman's Conference, Methodist Episcopal Church* (1898-1899), pp.83-84.

21　Donald G. Mathews, "Women's History/ Everyone's History," in Hilah F. Thomas and Rosemary Skinner Keller eds., *Women in New Worlds* (Nashville: Abingdon, 1981), p.44.

22　*Survey of The Japan Woman's Conferences, The Woman's Foreign Missionary Society of The Methodist Episcopal Church* (1924), p.54.（青山学院資料センター所蔵）

23　デーナ・ロバートによれば、第一次世界大戦後の女性宣教師の宣教活動は、ジェンダーによって分けられた世界を前提とする「女性のための女性の仕事」から、男性と共にエキュメニカルなイニシャティブをとる「世界親善」へとシフトした。（Dana L. Robert, *American Women in Mission: A Social History of Their Thought and Practice* [Macon: Mercer University Press, 1997], p.273.）世界親善はエヴェリン・ニコルソン（Everyn R. Nicholson）がWFMS会長時代（1922-40）の1923年に打ち出したメソジスト女性の海外伝道スローガンである。（千葉浩美「両大戦間期アメリカの平和運動における女性宣教運動の役割」『法政研究』第78巻第３号［2011年12月］、89頁。）

24　Clotilda L. McDowell, “A World Federation of Christian Women,” *Woman's Missionary Friend,* Vol.56, No.5 (May, 1924), p.170. https://hdl.handle.net/2027/mdp.39015030140126(accessed 02-12-2022).

25　その後の青山女学院とYWCAとのかかわりをみると、1917年に変化が生じている。YWCA報告において、「一、四五年前からの傾向とか伺ひましたが、宗教的反動とでも申ませうか、宗教学校に有得べからざる一種の空気が校内にありまして、その中にあつて青年会はその目的のためにつくす事は試に困難に感ずるもので御座います、又委員が社会的常識を欠いて居りますため、思ひがけない心配事を引き起す事もございます。二、まず失敗の事から申ます、一に対して答へましたやうな次第で昨年集会者少くまた脱会者も数ありました事は一つの大きな失敗で御座います。」と記されている。（『女子青年会』第４巻第８号［1917年９月］、63頁。）さらに、学内では、「英文専門科の最後の生徒が卒業して女子青年会の一部の部門を失ってからは、目立った活動は見られなくなった」ことが記録されている。（青山さゆり会編『青山女学院史』［青山さゆり会、1973年］、239頁。）

26　同上、223-224頁。

27　鵜飼猛編『開教五十年記念講演集　付祝典記録』（宣教開始五十年記念会事務所、1910年）、鈴木範久監修『近代日本キリスト教名著選集　第Ⅲ期　キリスト教受容史篇18』（日本図書センター、2003年）、196-271頁。

28　前掲拙稿、107-108頁。

29　拙稿「基督教女子教育会とキリスト教連合女子大学運動」キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会編『キリスト教学校教育同盟百年史紀要』創刊号（キリスト教学校教育同盟、2003年６月）、18頁。

30　同上、4-15頁。

31　『女子青年界』第15巻第１号（1918年１月）、35頁。

32　『女子青年界』第15巻第６号（1918年６月）、17頁。

33　“The Emancipation of the Women of the East”, *Woman's Missionary Friend,* Vol.50, No.11(November, 1918), p.381. https://hdl.handle.net/2027/mdp.39015021233948(accessed 02-12-2022).

34　湯川次義『近代日本の女性と大学教育―教育機会開放をめぐる歴史―』（不二出版、2003年）、

112頁、136-138頁。

35 『女子青年会』第14巻第６号（1917年６月）、16-17頁。

36 拙稿「基督教女子教育会とキリスト教連合女子大学運動」、24-27頁参照。

37 青山女学院校友会『会報』第22号（1919年７月）、102頁。（青山学院資料センター所蔵）

38 青山さゆり会編、前掲書、221頁。

39 青山なを編『安井てつ先生追想録』（安井てつ先生記念出版刊行会、1966年）、22頁。

40 青山女学院校友会『会報』第22号、113-120頁。

41 本連合会は４～５年活動を続けたが、加入女学校において会費の過重負担となることなどから解散した。（青山さゆり会編、前掲書、587頁。）

42 平塚益徳編著『人物を中心とした女子教育史』（帝国地方行政学会、1965年）、131頁。

43 青山なを編、前掲書、73-79頁。

44 拙稿「アメリカメソジスト派の伝道戦略と女子教育―青山女学院の場合―」、110頁。

45 塚本ハマ子『現代婦人の生活』（同文館、1935年）、16頁。（国立国会図書館デジタルコレクション）https://www.dl.ndl.go.jp/api/iiif/14442665/manifest.json(accessed 02-25-2021).

46 同上、1-9頁。